

## 鄭・子産伝

### 1. 広辞苑

中国、春秋時代の鄭の宰相。中国最初の成文法を作り、諸改革・外交に活躍した。  
( ~ 前 5 2 2 )

### 2. 春秋左氏伝 襄公 22 年 ~ 昭公 20 年。( 定公 8 年、9 年。哀公 5 年 )

時代背景：晉・楚二大国に挟まれ、晉についたり楚についたり定態なく、軍事的・経済的に終始圧迫され、民衆は疲弊し、内乱が頻発していた。小国の宿命といえる。

出自：鄭( 姫姓 ) の公子の家系出身

穆公 靈公

襄公 ・ 悼公

・ 成公 き公 簡公

子産( 末子 ) . . . 「史記・鄭世家」

・ 子国 子産 . . . . . 「春秋左氏伝」( 岩波文庫版 )

事跡関連：

子産の登場 . . . 襄公 19 年 ( 前 554 年 )

鄭の子孔の、政をなすや専らなり。国人<sup>こくにん</sup>之を患ふ。子展、子西、国人を率いて之を伐つ。公が弱かったので、鄭人子展をして摂政、子西を宰相、子産を卿に任じた。

襄公 22 年 ( 前 551 年 ) 子産、晉の朝見要請に応えて曰く。

夏、晉人、朝を鄭に徴す( 鄭が晉に朝見を求められた )。鄭人、少正・公孫僑( 子産 ) をして対へしめて曰く、「( 前略：鄭が晉に盟ったり、楚についたりしたにはかれこれの諸事情がありました。しかし、貴国( 晉 ) に ) 朝せざるの間、歳として聘せざる( 使節を送らざる ) ことなく、( 兵 ) 役として従はざること無かりき。大国( 貴国 = 晉 ) の政令常無く、国家罷病( 疲弊 ) して、不虞<sup>ふよ</sup>しきりに至るを以て、日として惕( 恐 ) れざるは無し。豈に敢えて職を忘れんや。大国もし之を安定せば、それ朝夕、庭に在らん。なんぞ命を辱( かたじけ ) なくせん。もしその患<sup>うれ</sup>ひを恤<sup>うれ</sup>へずして、以て口実をなさば、それすなわち君命に堪任せずして、翦せられて( 滅ぼされ )( 貴国 = 晉の ) 仇讎となること無からんや。弊邑是れ懼る。それ敢えて君命を忘れんや。これを執事に委ぬ。執事<sup>しつじ</sup>實に之を図れ」 と。

襄公 24 年（前 549 年）魯の穆叔、晉の執政・范宣子に、「不朽」の真意を説明す。

范宣子、穆叔に問て曰く、「古人言へるあり、曰く、死して朽ちず、と。何の謂ぞや」と。穆叔未だ對へず。宣子曰く、「昔我が祖先は、舜帝以前は陶唐氏といい、夏の時代には御龍氏といい、商の時代は豕韋氏といい、周時代は唐杜氏と言った。晉が夏盟を司ってからは、范氏となり栄え続けている。これを「死して朽ちず」と言うのだろうか」と。穆叔曰く、「私の聞くとを以てすれば、これを世録（せいろく）と言う。「不朽」というものではない。魯に先大夫あり臧文仲と曰ふ。既に没せるもその言世に立てり。それは是を之れ謂ふか。私はこれを聞く。 大上は徳を立つるあり。その次は功を立つるあり。その次は言を立つるあり。（この三つは）久と雖も廢せず。此れを之れ不朽と謂う。かの姓を保ち氏を受けて、以て宗祊（宗廟）を守り、世々祀りを絶たざるがごときは、国として之れ無きは無し。禄の大なるものなり。不朽と謂うべからず」と。

襄公 24 年（前 549 年）【象は齒（牙）ありて以てその身を焚（倒）す。】 焚身

晉の范宣子が執政となって政治を司ようになってから、諸侯の幣物が多くなった。鄭人之を病う。二月、鄭伯、晉にゆく。子産、書を子西に寓（よ）せ、以て宣子に告げて曰く、「子、晉国を為（治）む。四隣の諸侯、令徳を聞かずして、重弊を聞く。僞や之に惑う。僞聞く、君子の国家に長たる者は、賄い無きを之れ患ふるに非ずして、令名無きを之れ難しとす、と。それ諸侯の、公室に聚らば、則ち諸侯弑せん。（離れる、叛く）もし吾子これに頼らば、則ち晉国弑せん。諸侯弑せば、則ち晉国壊れん。晉国弑せば、則ち子の家壊れん。何ぞ没没たるや。將にいづくにか賄を用いんとする。それ令名は、徳の輿なり。徳は、国家の基なり。基あらば壊る無し。亦是を務むることなからんや。徳あらば則ち樂しむ。樂しまば則ち能く久し。詩に云う、  
<樂只の君子は、法家の基>、と。れ令徳あればなるかな。  
<上帝女に望む、（万民は）爾の心に弑する無し>、と。令名あればなるかな。  
如思して以て徳を明らかにせば、則ち令名載せてこれを行ふ。是を以て遠きは至り、邇（近）きは安んず。むしろ人をして子を謂はしめよ、子実に我を生かす、と。而るに子、我を浚（さら）ひて以て生くと謂はしめんや。象は齒ありて以て其の身を焚（倒）す。賄（たから）あればなり」と。宣子説び、すなわち幣を軽くす。

襄公 25 年（前 548 年）齊の崔杼、其の君を弑す。晏子は「民の望なり」とて捨て置く。崔杼の家臣・東郭偃の姉は齊の大夫・棠公の妻（棠姜）だったが、棠公が死ぬと、崔杼に見初められ妻になった。しかし、かねてから棠姜と私通していた莊公が崔杼の冠を勝手に他人に賜ったのを怨み、崔杼の館で殺された。大史は、「崔杼其の君を弑す」と記録した。

襄公 25 年（前 548 年）鄭の子展・子産、陳を伐つ。

かつて陳公、楚子と会盟して鄭を伐ったが、陳軍が通過した沿道は、井戸は埋められ、樹木は伐り倒された。鄭の人はこれを恨み、子展・子産が七百輛の兵車で陳を攻めて勝った。陳攻撃を晉の許可無く行ったに際し、子産は献上する戦利品を携え、軍服姿でその理由を礼に適って述べ、「その辞は順（道理に適っている）なり」として范宣子に代わって執政となった趙文子に了承された。

仲尼曰く、志（古書）に之れあり。「言は以て志を足し、文（レトリック）は以て言を足す」と。言はずんば、誰か其の志を知らん。言の文無きは、行はるるも遠からず。晉、伯（覇者）となり、鄭、陳に入る。文辞に非ずんば功をなさず。辞を慎まんかな、と。

子産が然明に政治のやり方を問うた。然明曰く、

「民を視ること子の如く、不仁者を見れば、これを誅すること鷹鷂（せん＝隼）の鳥雀を逐ふが如くす」と。

子大叔、子産に政を問う。子産曰く、

「政は農功の如し。日夜之を思ひ、其の始めを（慎重に）思ひて、其の終りを（立派に）成し、朝夕にして之を行い、行い思いを越ゆること無し。農の畔あるが如くならば、其の過ち鮮し」と。

襄公 26 年（前 547 年）鄭伯、入陳の功を子産に賜るも、子産邑を辞退す。

鄭伯、陳に入りし功を賞す。子展に先路三命の服を賜い、八邑。子産に次路再命の服を賜い、六邑。子産、邑を辞して曰く、「身分の高い上席から順々に二つずつ減らすのが決まり（礼）です。臣の位は四にあり。且つ子展の功なり。臣敢えて賞礼に及ばず。請う邑を辞せん」と。公固く之を予（与）う。すなわち三邑を受く。公孫揮曰く、「子産は其れ將に（国）政を知（為）さん。譲りて礼を失わず」と。

衛公晉に行き、囚えられる。齊公・鄭伯、衛公の為故に晉にゆく。晉公、衛公の罪を言い、二君に告げた。子展、詩經の「鄭風・將仲子」を賦し、晉公、すなわち衛公を帰す。

將に仲子、我が園を踰ることなかれ 我が樹えし檀（木）を折ることなかれ 豈敢えて之を愛まんや 人の多言を畏る 仲も懐うべきなり 人の多言も 亦畏るべきなり  
晉の叔向曰く、「鄭の七穆、罕氏は其れ後に亡ぶ者なり。子展は俟にして壹なり」と。

襄公 27 年（前 546 年）齊の崔杼・妻自殺す。崔氏亡ぶ。

襄公 27 年（前 546 年）趙孟、鄭の七子を賦を以て其の志を觀る。

鄭伯が、晉の国政を牛耳る大夫、趙孟（趙武～前 541 年）を垂隴でもてなした。

子展、伯有、子西、子産、子大叔（游吉）、二子石（印段と公孫段）の計七名が鄭伯に隨行した。趙孟は言った。「七子が来られたのは甚だ光榮です。全員が詩を賦して鄭君の饗宴を終えたい。又、私も諸兄の志を伺うことにしたい」と。

1．子展は、「召南・草虫」を賦した。

彼の南山に陟り 言（ここ）に其の蕨を采る 未だ君子を見ず 憂心掇掇（てつてつ）たり 亦既に觀れば 我が心則ち説ばん （二）・・・・・・趙孟の如き君子に従いたい寓意

2．伯有は、「鄘風・鶉之賁賁（じゅんしほんほん）」を賦した。

鶉（かささぎ）は之れ彊彊たり 鶉は之れ奔奔たり （鶉も鶉も連れ立って行く）  
人の良きこと無き 我以て君と為す （二）・・・・・・鄭君に不満の寓意

3．子西は、「小雅・黍苗」を賦した。 趙孟を召伯に例えた寓意

芄芄たる黍苗 陰雨之を膏（潤）す 悠々たる南行 召伯之を勞す （略）  
肅々たる謝（邑）の功召伯之を嘗（治）む 烈々たる征師 召伯之を成す

4．子産は、「小雅・隰桑」を賦した。

隰桑阿たることあり（桑の葉が柔らかく茂っている） 其の葉沃たることあり  
既に君子を見ば ここに何ぞ楽しまざらんや・・・・・・柔軟で徳で諸侯を手なずけた寓意

5．子大叔は、「鄭風・野有蔓草」を賦した。

野に蔓草あり 零露漙漙たり 美なる一人の 清揚婉々たるありて 邂逅に相遇はば  
我が願いに適へり・・・・・・思いがけず趙孟に会えて嬉しい寓意

6．印段は、「唐風・蟋蟀」を賦した。

蟋蟀（こおろぎ）堂にあり 歳ついに其れ暮れん 今我楽しまずんば 日月其れ除（去）らん 已（はなは）だ大いに康（楽し）むことなかれ 職として其の居を思え 楽しみを好むも荒むことなかれ 良士は瞿瞿たり・・・・・・楽しむも心を引き締めたいの寓意

7．公孫段は、「小雅・桑扈」を賦した。

交交たる桑扈は 鶯たる其の羽あり 君子楽胥し 天の祐を受く・・君子天佑を受く寓意。

趙孟は子展が最高、印段が次位とし、伯有はそのうち殺されるだろう、と叔向に言明。

伯有、趙孟の予言通り奢り、弑さる。 襄公 28 年（前 545 年）～ 30 年（543 年）

魯の襄公、鄭に過ぎる。鄭伯在らず。伯有ゆきて黄崖に労う。不敬なり。（魯の）穆叔曰く、伯有、鄭に戻（罪）せらるる無くんば、鄭必ず大咎あらん。敬は、民の主なり。而るに之を棄つ。何を以てか承守（先祖を受け継ぎを守る）せん。鄭人討ぜずんば、必ずその暈（罪）を受けん」と。（襄公 28 年）

呉の公子季札（延陵の季子 呉王寿夢の第四子。賢なる故に位を譲らんとし受けず）使節として鄭に来朝。（襄公 29 年）

子産に謂いて曰く、「鄭の執政（伯有）侈（奢）る。難、將に至らんとす。政必ず子に及ばん。子、政をなさば、之を愼むに礼を以てせよ。然らずんば、鄭国將に敗れんとす」と。

伯有が、楚・鄭反目の時期に子暫を楚に派遣しようとしたが断った。伯有が強制的に行かせようとしたので、子暫は怒り伯有の邸宅を攻めようとした。大夫が和解させ盟を交わした。大夫の裨諶が曰く、「この盟誓はどれだけ続くやら。詩に曰く、『君子<sup>しばしば</sup>屢々盟ふ。乱是を以て長ず』（小雅・巧言）と。今是れ乱を長ずるの道なり。禍未だやまざるなり。必ず三年にして後に能く紓（ゆる）まん」と。

然明曰く、「政、將にいずれにか往かんとする」と。裨諶が曰く、

「善の不善に代わるは、天命なり。其れいずれくんぞ子産を避けん。善を選びて挙げれば、則ち世の隆なり。天鄭に禍すること久し。其れ必ず子産をして之を息はしめん。すなわち猶以て戻るべし。しからずんば將に亡びんとす」と。（襄公 29 年）

鄭の伯有、酒を嗜み、窟室を為りて、夜、酒を飲み鐘（楽）を撃つ。朝至れども未だやまず。朝する者曰く、公いずくにか在る、と。その人曰く、吾が公、壑谷（地下室）に在り、と。皆、朝より布路（散々に）して罷（退）く。 伯有、羊肆に死す。（襄公 30 年）

襄公 29 年（前 544 年）子皮（子展の子）飢饉に戸毎に粟を贈る

鄭の子展卒す。子皮位に即く。是に於いて、鄭飢えて、未だ麦（収穫の時期）に及ばず民病む。子皮、子展の命を以て、国人に粟、戸ごとに一鐘を餼（おく＝支給す）る。是を以て鄭国の民を得たり。故に罕氏常に国政を掌（司）りて、以て上卿となる。

宋の司城子罕（楽喜）之を聞きて曰く、善に鄰りするは、民の望みなり、と。宋亦飢う。平公に請い、公粟を出して以て貸し、大夫をして皆貸さしむ。司城氏は貸して書せず（証書を取らなかった）。大夫の無き者の為に貸す。宋に飢人無し。

叔向、之を聞きて曰く、鄭の罕、宋の楽は、其れ後に亡ぶ者なり。二者其れ皆国を得んか。民の帰なり。施して徳とせざるは、楽氏加（まさ）れり。其れ宋と升降せんか、と。

襄公 30 年（前 543 年）。子産、政を為す。孔子は十歳 前 522 年迄（孔子三十一歳）

鄭の子皮、子産に政を授く（政権を譲渡）。治政の要は下記の如し。

- 1．都鄙をして章あり・・・国都と地方で車服の尊卑を区別し、
- 2．上下をして服あり・・・卿大夫等、身分の上下の服務規程を定め、
- 3．田をして封洫あり・・・田地の堺となる畦や灌漑溝を設け、
- 4．廬井をして伍あらしむ・・・井田に住む農家に組合を作らせ、相互扶助させた。
- 5．大人（卿大夫）の忠俟なる者は、従いて之に（褒賞を）与え、泰侈なる者は、因りて之を（処罰し）斃（たお）す（＝滅亡・放逐した）。

政に従うこと一年にして、輿人（大勢の人たち）之を誦して曰く、我が衣冠を取りて之を褚（蓄）へしめ、我が田疇を取りて之を伍にす。孰れか子産を殺さん。吾其れ之に与せん、と。・・・奢侈を禁じ、相互扶助で税を課したのを非難。

三年に及びて、又之を誦して曰く、我に子弟あり、子産之を誨ふ。我に田疇あり、子産之を殖（増や）す。子産にして死せば、誰か其れ之を嗣がん、と。

襄公 31 年（前 542 年）子産、晉に行きて啖呵を切る

魯の襄公が 6 月に薨じた。子産は、鄭伯（簡公）を補佐して晉に赴いた。晉公（平公）は魯が喪中ということを理由に、一行に会わなかった。（旅館が狭く粗末なのを不満として）「子産、盡（ことごと）く其の館の垣を壊して車馬を納れしむ」。晉の士文伯がそれを責め、晉君に報告するため理由を質した。

我が国は狭小で大国に挟まれ、誅求、時無きを以て（貢納の要求定めがないため）、かく慌しく貢物を掻き集めて朝会しに来た。しかるにそちらでは暇もなく、お目にかかれぬ上に、何の御沙汰もなく、いつお目見えできるかわからない。礼物はまだ引き渡さずにある。日光や夜露に濡れぬようにしてある。何故なら乾燥したり湿気で礼物が腐敗して我が国の罪を重ねることになるからで聞くところによれば、晉の文公（重耳）の頃は、宮室を卑しくして、諸侯を泊める旅舎を壮大にされ、建物の修理に余念無きは勿論、百官はもてなしに十分留意し、賓客に気を配り、いたずらに引き留めずして彼らと憂楽をともにされた、という。だから、賓客はまるで我が家に帰るようであった。しかるに今、宮室は数里にわたる豪華なのに比べ、諸侯は奴隸人の如く粗末な小屋に入れられ、門は車が入れぬほど狭く、かといって垣根を越えられない。盜賊横行し、疫病の備えなく、其の上会見の見通し立たず、接見の命がいつ下るかわからない。もしこのまま塙を壊さずにおけば、礼物腐敗させるばかりで罪を重ねることになってしまう。魯の喪に服していると申されるが、当国とても憂慮は同じだ。礼物を献上させて頂ければ、塙を修理して出発いたす所存。お取次ぎ願いたい、と。趙文子はごもっとだとして失礼を詫びた。叔向は、子産の文辞を誉めた。



襄公 31 年（前 542 年）子産の政を行うや、能を選びて之を使う。

子曰く、命（政府の重要文書）を為るに、裨諲之を草創し、世叔（子大叔）之を討論し、行人（外交官）子羽之を修飾し、東里の子産之を潤色す。（憲問第十四の 9）

鄭国、將に諸侯の事あらんとすれば、子産すなわち四国の為（しわざ）を子羽に問い、且つ多く辞令を為（作）らしめ、裨諲と乗りて以て野に適き、可否を謀らしめ、馮簡子に告げて之を断ぜしめ、事成れば、すなわち子大叔に授けて之を行わしめ、以て賓客に應對せり。是を以て敗事あること鮮し。

襄公 31 年（前 542 年）子産、皆に討論・批判をさせそれを薬とすることの重要性を説く。

鄭人、郷校に遊び、以て執政を論ず。然明、子産に謂いて曰く、郷校を毀たば如何、と。子産曰く、「何ぞ為さん。夫人（ひとびと）朝夕して退きて遊び、以て執政の善否を議す。其の善しとする所の者は、吾則ち之を行い、其の惡しとするところの者は、吾則ち之を改めん。是れ吾が師なり。之を如何ぞ之を毀たん。我、忠善を以て怨みを損する（避ける）を聞く。威を作して以て怨みを防ぐを知らず。豈に遽（にわ）かに止めしめざらんや。然れども猶ほ川を防ぐがごとし。大決（潰）の犯す所は、人を傷つくること必ず多し。小決して導かしむるにしかず。吾聞きて之を薬とするにしかざるなり」と。

襄公 31 年（前 542 年）子皮、子産の善言を聞く。

子皮が、家臣の尹何を邑宰に任命しようとした。子産曰く、「少（若）し。未だ可否を知らず」と。子皮曰く、「愿（真面目）なり。吾之を愛す。吾に叛かざるなり。彼をして往きて学ばしめば、それ亦愈々治を知るらん」と。子産曰く、「不可なり。人の人を愛するは、之を利せんことを求むるなり。今、吾子の人を愛するは、則ち政を以てす。猶ほ未だ刀を操ること能はずしてかしむるときなり。その傷つくること実に多からん。（中略）僑（子産）学びて後に政に入るを聞く。未だ政を以て学ぶ者を聞かざるなり。もし果たして此れを行はば、必ず害する所あらん。（後略）」と。（中略）

子皮曰く、「善いかな。今より請う、吾が家と雖も、子に聴きて行わん」と。

子産曰く、「人心の同じからざるは、其の面の如し。吾豈に敢えて子の面を吾が面の如くせよと謂（思）はんや。そもそも（ただ）心の危うしと謂（思）う所は、亦以て告ぐるなり」と。子皮以て忠と為す。故に政を委ぬ。是を以て能く鄭国を為（治）む。

#### 昭公4年（前538年）子産、重税を課し誹謗される

鄭の子産、丘賦を作る。（丘（16井）ごとに馬一頭、牛三頭を課す従来よりは重税）  
国人之を謗りて曰く、「親父（子国）は路上で殺されて、（襄公10年）己は蠍の尻尾となつて、国に有害な法令を下す。一体国をどうするか」と。大夫の子寛がこれを報告すると、子産は言った。

「何ぞ害あらん（心配いらぬ）。もし社稷に利あらば、死生之を以てす。且つ吾聞く、善を為す者は其の度（方針）を改めず。故に能く濟（な）すことあり、と。民は逞しくせしむべからず（甘やかしてはいけない）。度は改むべからず。詩に曰く、礼儀愆（誤）らずんば、何ぞ人の言を恤（憂）えん、と。吾は遷らず」と。

子寛が曰く、「国氏（子産の家）は誰よりも先に滅びるだろう。君子が軽い税をかけても、結果はやはり重くなるもの。まして貪欲な重税を課せば、将来どんな弊害が起きるだろうか。政が先代の法に従わずして、子産の心（考え）で新法を決めたが、民にも各々心がある。そうになったら上もへちまもあったものではない」と。

#### 昭公6年（前536年）晉の叔向が刑法のことで子産に苦言を呈す

鄭人が刑法の条文を鼎に彫りつけた。叔向、子産に書を送って曰く、  
「昔、先王、事を議して以て制し、刑辟（刑法）を為らざりき。民の争心あることを懼れてなり。それでも禁止しきれないので、義によって防ぎ、政によって正し、礼によって施行し、信によって守り、仁で養われた。又禄位を定め、それに従順なものを励まし、刑罰を嚴重にし、その淫乱を威嚇した。それでも未だ不十分を心配して、民に教えるに忠を以てし、善行を奨励し、專業を教え、和や敬で接し、彊・剛で接触した。さらに聖哲学のお卿、明察の官、忠信なる郷長、恵ある老師を求めた。かくて民はそれぞれ役立ち、禍乱は起こらなかった。（そもそも）民刑辟あるを知らば、則ち上を忌（畏）れず。並びに争心ありて、以て書に徴して、徹幸（抜け道）して以て之を成し、為すべからず。  
夏、商、周それぞれに乱政あって「禹刑」「湯刑」「九刑」が出来た。この三刑法が出来たのは皆、末世のこと。貴兄が鄭国の宰相として、封洫を設け、丘賦の重税を課し、刑法を鼎に彫りつけんとすることは、民を安んずるには難しいというべきだろう。（中略）私は聞いている、『国の亡びんとするや、必ず制多し』と。如何か」と。

子産、復書して曰く、「吾子の言の如し。僞、不才にして、子孫に及ぶ事能はず。吾は以て（現在の）世を救はんとするなり。既に命を承げざるも（仰せに従えぬものの）、敢えて大恵を忘れんや」と。



昭公 12 年（前 530 年）鄭の簡公卒す 定公立つ又、子皮卒す。子産号泣す。

昭公 18 年（前 524 年）、19 年。子産、巫術等の迷信を排撃す

夏 5 月、大火の星が黄昏に見え始めた。魯の大夫・梓慎が、これは融風といって、火災の始まりだ。七日目にきっと火災が起こる、と言った。三日目から風がひどくなり、宋・陳・鄭に皆火災が発生した。鄭の裨竈が「私の言葉を用いないと、鄭に又火災が発生する」と言ったので、子大叔が心配して子産に相談すると、子産曰く、

「天道は遠く、人道は邇し。及ぶ所に非ざるなり。何を以て之を知らん。竈、いずくんぞ天道を知らん。是れ亦多言なり。（おしゃべりで、たまたま当たったのだろう）豈に信或らざらんや」と。遂に与えず。亦複た火あらず（二度と起こらなかった）（昭公 18 年）

昭公 19 年、鄭、大水あり。竜が鄭城の西門である時門の外の深淵で戦った。国人がお祓いの祭りを請願したが、子産は許さなかった。「我々が闘っても、竜は見向きもしない。だから竜同士の戦いも見に行く必要はない。たといお祓いをして、竜の棲みかだ。我々が竜に求めることはないのだから、竜もこちらに何も求めてきはしまい」と言ったので、取りやめになった。（昭公 19 年）

昭公 20 年（前 522 年）鄭の子産疾あり。 卒す

鄭の子産、疾（病）あり。子大叔に謂いて曰く、「我死なば子必ず政を為さん。唯だ有徳者のみ、能く寛を以て民を服す。其の次は猛にしくは無し。それ火は烈なり。民望みて之を畏る。故にこれに死する者鮮し。水は懦弱なり。民狎れて之を玩ぶ。則ちこれに死する者多し。故に寛は難し」と。疾むこと数月にして卒す。

大叔、政を為す。猛に忍びずして寛にす。鄭国、盗多く人を荏符の澤に取る（寄り集まった）。大叔、之を悔いて曰く、「吾、早く夫子に従はば、此に及ばざらん」と。徒兵を興して以て荏符の盗を攻め、盡く之を殺す。盗少しく止む。

仲尼曰く、善いかな。政寛なれば則ち民慢（あなど）る。慢なれば則ち之を糾すに猛を以てす。猛なれば則ち民残（害＝そこな）はる。残なれば則ち之を施すに寛を以てす。寛以て猛を済い、猛以て寛を済う。政是を以て和す。（中略）

子産卒するに及び、仲尼、之を聞き、涕を出して曰く、古の遺愛なり、と。

（あの方の仁愛には、古人の遺風があった）

子、子産を謂う、「君子の道四あり。其の己を行うや恭、其の上に事うるや敬、其の民を養うや恵、其の民を使うや義」と。（公冶長第五の 16）

或るひと子産を問う。子曰く、恵人なり、と。（憲問第十四の 10）

## 子産の是々非々・・・昭公十六年（前 526 年）

### 執政の役割

三月、晉の韓起（韓宣子）が鄭に使節として聘問した。子産、（官吏たちに）戒めて曰く、苟くも朝に位あらば、共恪（共に慎む＝不敬なきようにする）せざる事有る無かれ、と。孔張、後れて到り、客の間に立つ。執政（係りの役人）之を禦す（止める）。客の後ろに適く。又之を禦す。懸間（楽器の立掛けてある場所）に適く。客従って之を笑う。

事畢（終わ）る。（大夫の）富子諫めて曰く、「夫（彼）は大国の人、慎まざるべからざるなり。幾たびか之に笑われて、我を陵（しの）がんや（侮蔑されてしまう）。我皆礼ありとも、夫（彼）猶ほ我を鄙とす。（卑しまん） 国にして礼無ければ、何を以てか榮を求めん。孔張、位（座る場所）を失いしは、吾子の恥なり」と。

子産怒りて曰く、 命を発するの衷（中）らざる、 令を出すの信ならざる、 刑の頗類（偏頗）なる、 獄の放紛（放縦紛乱）なる、 会朝（会盟・朝見に）の敬せざる、 使命の聴かれざる（下の者が辞命令に従わず）、 陵（辱）を大国に取り、民を罷（疲）らして功無く、罪及びて（それを）知らざるは、僞（私）の恥なり。

孔張は、君（襄公）の兄・子孔の孫で、執政の後嗣なり。嗣大夫と為り、命を承家て以て使いして、諸侯に周し。国人の尊ぶ所、朝に立ちて家に祀る。国に禄あり、軍に賦あり、喪祭に職あり、（祭肉の）賑を受け賑を歸（献上す）る。其の祭りに廟あれば、己著位あり。位にあること数世、世々其の業を守る。而るに其の所を忘る。（これは本人の問題である）僞、いづくんぞ之を恥ずるを得ん。辟者（不整の者）の人ありて、皆（責任が）執政に及ばば、是れ先王、刑罰無きなり（刑罰など設けなくてよかった）。子寧ろ他を以て我を規（正）せ、と。

### 子産、晉の大夫・韓宣子が玉環を欲するを断る（昭公十六年）

韓宣子、環あり。其の一（対の片方）は鄭の商にあり。韓宣子、之を鄭伯に謁（請）う。子産与えずして曰く、「官府の守器に非ざるなり。寡君知らず」と。子大叔・子羽、子産に謂いて曰く、「韓氏も亦、幾ばくの求めも無し。晉国には亦未だ以て弑す（叛く）べからず。晉国と韓氏とは儉（薄）くすべからざるなり。もしたまたま讒人の其の間に溝交（晉・鄭の交わりに溝を作らんと）する者ありて、鬼神にして之を助けて、以てその凶怒を興さば、之を悔ゆるとも何ぞ及ばん、吾子何ぞ一環を愛しみて、其れ以て憎しみを大国に取らんや。なんぞ求めて之を与えざる」と。

子産曰く、「吾、晉に偷（薄）くして二心あらんとするに非ず。將に之に事へんとす。是を以て与えず。忠信の故なり。僑聞く、『君子は賄（賂）無きを之れ難しとするに非ず。立ちて令名無きを之れ患う』、と。僑聞く、『国を為むるは大に事へ小を字（慈し）むこと能はざるを之れ難しとするには非ず。礼以て其の位を定むること無きを之れ患う』、と。

それ大国の人、小国に令して、皆その求めを獲ば、（ついには）將に何を以てか之に給せんとする。（又一方で）一は（提）供し一は否らざれば、罪たること滋（益々）大なり。大国の求めは、礼以て之を斥くこと無くば、何の贖くことか之れあらん。吾まさに鄙邑と為らんとし、則ち位を失はん。もし韓子、命を奉じ以て使いして玉を求めば、貪淫甚だし。独り罪に非ざらんや。一玉を出して以て二罪（鄭は地位を失し、韓氏は貪欲の汚名）を起こし、吾又位を失い、韓氏、貪を成さんこと、はたいずくにぞ之を用いん。且つ吾、玉を以て罪を買はんこと、亦鋭（些小のこと）ならずや』、と。

韓氏はその玉環を直接商人と交渉して取引が成立した。そして商人が、必ず大夫に報告して下さい、と言うので、子産にその旨要請したら、子産曰く、「昔、我が先君桓公と商人とは、皆周より出て、協力しあってこの土地を整理し、野草雑木を刈り払って、一緒に住むようになった。以来、代々盟誓を交わして以てお互いに信頼しあった。曰く、『爾、我に叛くこと無かれ。我強いて買うこと無く、請い奪うことある無からん。爾、利得・宝貨あるも、我れ与り知ることなからん』、と。この質誓を恃み、故に能く相保ちて以て今に至る。今、吾子、好みを以て来たり辱くして、而して弊邑に商人より強奪せよと謂はば、是れ弊邑をして盟誓に背かしむるなり。則ち不可ならんや。吾子、玉を得て諸侯を失ふは、必ず為さざるなり。もし大国、令して共せしめ、求めて芸（法）無くば、鄭は鄙邑なるも、亦為さざるなり。僑、もし玉を献げば、成る所を知らず（一つとてうまくいかなかった）。敢えて私（ひそ）かに（内々に）之を布く（申し上げる次第です）』、と。韓氏、玉を辞して曰く、「起（私は）、不敏（なれど）、敢えて玉を求めて以て二罪を傲（求）めんや。敢えて之を辞す』、と。

### 昭公十六年（前526）韓宣子餞別の宴での詩賦

「鄭風・羔裘（こうきゅう）」・・・人物を褒める寓意

「鄭風・褰裳（けんしょう）」・・・晉が当てにならねば他人の所へ行く寓意

「鄭風・風雨」・・・君子に会えて心安らぐ寓意

「鄭風・有女同車」・・・美德をいつまでも忘れぬ寓意

「鄭風・野有蔓草」・・・会えて嬉しい寓意

「鄭風・蘄兮（たくけい）」・・・命令に従う寓意